

現代日本における樹木葬の実態と今後

—背景・形態・申込者の状況—

The present situation and the future of “Tree Burial” in Contemporary Japan

—Background・Form・The situation of the applicant—

井 上 治 代

INOUE Haruyo

要旨

日本の家族形態は、2010年の国勢調査でみると、それまで一番多かった「夫婦と子どもから成る世帯」を押さえて、「単独（一人）世帯」が第一位になり、日本史上初めてのモデルなき時代に突入した。そういった中で、伝統的な墓の継承システムをとらず、かつ自然志向の樹木葬が、その数を増やしている。墓の新形態としての樹木葬の増加は日本だけではなく、先進国の中で高度経済成長を成し遂げた後の社会に登場している。本稿は、日本と同じく近年、樹木葬墓地が増加している韓国において国際セミナー（翰林大学校生死学研究所・ソウル市施設公団共催。「ウェルディングと成熟した葬礼文化のために」2015年9月11日、於ソウル・グローバル・センター）が開催されたときに、筆者が招聘され、日本の樹木葬の実態を発表したときの原稿である。

日本の現代社会では多様化した生き方が市民権を得る一方で、自分の最期は自分で考え準備しなければならない社会が訪れ、家族で代々守っていくお墓のシステムは、意味が薄れつつある。筆者が実施した意識調査によって、すでに樹木葬は決して跡継ぎのいない人々のための墓ではなく、一般的な選択肢の一つであることがわかる。人々は伝統の良さを踏まえつつも、それに代わる新しいコミュニティ、追悼のあり方を模索しはじめている姿が捉えられた。

戦前の家制度時代のような「家族の永遠性」が見込まれない時代に、家族も含みつつ「自然の永遠性」にかぎりなく回帰していく。このように樹木葬は、家族の変化や自然破壊が起こった、高度経済成長を成し遂げたあとの社会に出現する傾向があり、先進諸国に共通して見られる墓の一形態である。

キーワード：Tree Burial A social change and grave Natural intention

1. 樹木葬登場の社会背景

1-1. 一般墓の形態

日本の樹木葬について説明するにあたって、日本社会における伝統的な一般墓の形態と、近年の変化について簡単に記しておくことにしたい。

日本人は古来より、人が死ぬと肉体から死霊が遊離し、死後しばらくは荒ぶれた不安定な霊魂として存在すると考えてきた。それを子孫が長期にわたって祭祀することによって、死霊は子孫を加護するような祖霊に昇華する。この霊肉二元論にもとづく祖霊信仰を下地に、やがて家意識の発達と、仏教による意味づけによって、今日の葬儀・墓・年忌といった葬祭儀礼が形づくられた。その中で墓は、家の先祖をまつる屋外の施設であり、代々続く「家」のシンボルとされてきた。

現代日本における一般墓の特徴をあげると次のようになる。

1. 家族墓

2. 墓地は許可制

(私有墓地は許可されない。

墓地経営の許可をもらえる団体＝地方自治体、公益法人、宗教法人)

3. 使用権、継承制

(墓地という土地を買うのではなく、墓所の使用権を買い、継承者を決めて継承していく)

4. 葬儀やその後の年忌、9割は仏教式

いま日本の墓の多くが「家族墓」で、家族によって代々継承者を決め、その者が管理料を払うという条件のもと、永続使用するという継承制をとっている。これは戦前までの家制度の残滓にほかならない。継承者が絶え管理料が途絶えれば、遺骨は片付けられ、墓の使用権を失うのである(「墓地、埋葬等に関する法律施行規則」で「無縁墳墓の改葬」の手続きが示されている)。

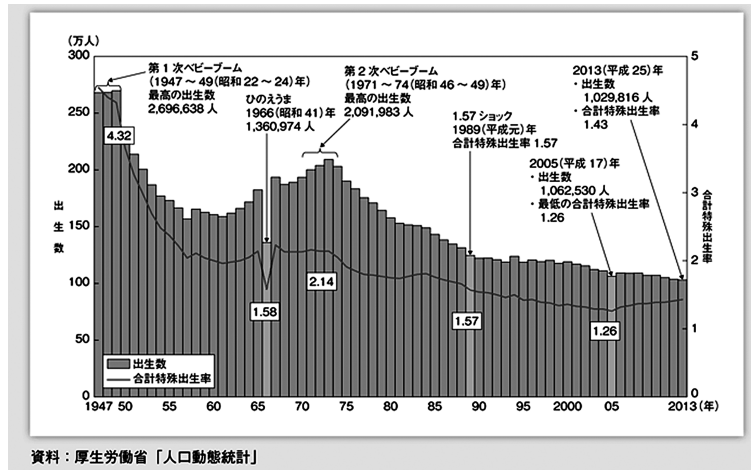
1-2. 家族形態の変化

上記のような伝統的な墓のあり方は、戦後の家族の変化によって、次第に現代人に適合しなくなっていった。

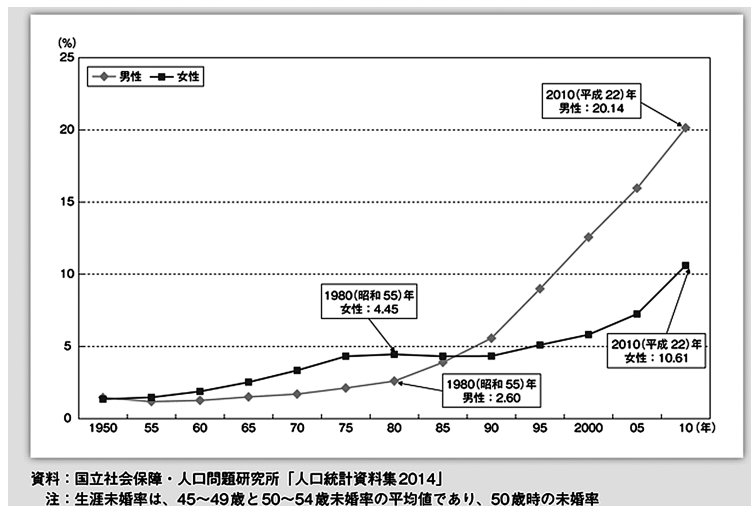
戦前のような、子が結婚後も親と同居して一定の地域に住み続けるような家族形態では、親から子へという墓の継承は適合していた。しかし戦後に主流になった核家族は、子が巣立れば「夫婦だけ」になり、その一方が亡くなれば核家族の最晩年の姿は「独居」。そして最後の一人も亡くなれば、核家族は一代限りで消滅する。このように戦前の直系制家族である「家」と「核家族」では「永続」対「一代限り」といったように大きく異なっている。ここに墓の問題発生につながる構造的な違いがある。

また、近年の少子化(図表1)や子どもを持たない夫婦の増加、離婚率の上昇、生涯未婚率の上昇(図表2)⁽¹⁾は、墓から見れば継承者のいない人の増加を意味した。このような状況のなか、永続規範に支えられた墓の継承制が、一種の文化遅滞症状を起こしながら、1990年代以降の個人を単位とした社会でドラスティックな変化を見せた。

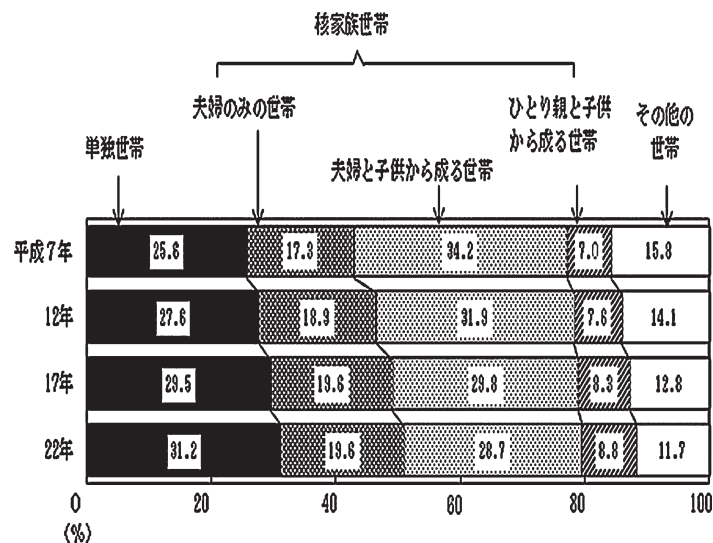
2010年の国勢調査では、それまで家族の形態で一番多かった「夫婦と子どもから成る世帯」を押さえて、



図表1 出生数及び合計特殊出生率の年次推移
出典：平成25年版『少子化社会対策白書』p 1



図表2 生涯未婚率の年次推移
出典：平成25年版『少子化社会対策白書』p 5



図表3 家族の類型（平成22（2010）年「国勢調査」）
出典：総務省「平成22年国勢調査人口等基本集計結果 結果の概要」p30

「単独（一人）世帯」が第一位になった（図表3）。日本史上初めてのモデルなき時代に突入したのである。

1-3. 1990年代の墓の変化

先にも述べたように、かつての日本の「家」は、家系上の先人である先祖を祀り、世代を超えて永続することが期待され、またそれを可能にする「継承性」に際立った特質があった。ところが戦後、核家族化がすすみ、家族が不連続化しているにもかかわらず、依然として墓は継承システムをとってきたため、墓の継承問題が浮上した。「家の墓」を代々子孫が「永代」に守っていく継承システムが制度疲労を起こし、代替システムが模索された。

1990年代に登場した代替の傾向は、脱継承・双方化・自然志向・個人化である。具体的には、寺が運営する「永代供養墓」や、地方自治体が運営する「合葬式墓地」（写真1）などと呼ばれる継承を前提としない「非継承墓」が出現した（脱継承）。また少子高齢社会を背景に、夫も妻も墓の継承者どうしといったケースが増え、夫方妻方、双方の死者を一緒に祀る「両家墓」も増えた（双方化）。また、散骨や樹木葬といった墓石を設けなくて自然に還る葬法が登場した（自然志向）。さらに、自分で用意する「生前墓」や、オリジナル・デザインの墓石が増えた（個人化）。



神奈川県横浜市立「日野公園墓地」合葬式納骨堂



東京都立「小平霊園」合葬式墓地

写真1 横浜市と東京都の合葬式墓地（非継承墓）

2. 日本の樹木葬の形態

2-1. 用語の定義

韓国では国家が主導して火葬化が進められ、「葬事等に関する法律」の中に「自然葬」の条文規定が加わったが、日本の場合、国はほとんど動かず、一般市民の声で変革が起きたといってもいいだろう。したがって1990年代に登場した新しい形態の墓に関しても「墓地、埋葬等に関する法律」が改正されたわけではなく、樹木葬に関しても新規に条文が加わったわけではない。

したがって「樹木葬」とは、「墓地、埋葬等に関する法律」（「墓埋法」と略す）に則って墓地として都道府県知事の許可を受けた区域に、従来のような個別の外柵や墓石を設けず、遺骨を土中に埋め

て、樹木を墓標とする葬法のことをいう。

同じ自然志向の葬法でも、「散骨」が「墓」をつくらず、墓地以外に埋めてはいけないと規定する墓埋法の範疇外で行っているのに対して、樹木葬は墓埋法上、墓地として許可を受けた区域に樹木葬という形式の墓をつくっている点で異なっている。

2-2. 樹木葬のはじまり

日本の樹木葬墓地は1999年に岩手県一関市の祥雲寺（現・知勝院）が開設したことから広まったといわれている。しかし、このような自然志向の墓地がそれまで発想されていなかったかという点、そうではない。葬送の分野が大きく変化し始めたのは1990年であったと先に記した。継承者を必要としない墓の活動が本格的に始動したのも90年、散骨という自然志向の葬法が注目され始めたのも90年、ちなみに葬送をテーマにした市民団体が発足したのも90年であった。

同じく90年に発表された東京都の新霊園等構想委員会でも、新たな墓地形態としてヨーロッパの森林墓地が紹介され、続く1997年に答申を出した霊園管理問題等検討委員会の中でも新霊園計画への提言として、森林墓地などがその一形態として話題にあがっていた。民間でも（株）日本墓苑開発センターが、市民団体「21世紀の結縁と葬送を考える会」と協働して、東京近郊の森林に樹木墓地の計画を進めていた。現地事務所ができ、会員による現地合宿まで行って夢を温めたが、樹木墓地は実現することはなかった。

このように森林墓地は自然が少ない都会で構想されていたが、それを可能にする土地の確保が難しく、かつ土地が確保できたとしても、直接遺骨を土に埋める葬法は近隣住民の反対にあうことが予測されていた。自然に憧れつつも森林墓地が実現できない都会人を対象として樹木葬を構想したのが、地方の寺院であった。一関市では、人の手が加わらなくなった里山が点在し、産業廃棄物業者のトラックが往来しはじめていたが、そこを墓地にすることによって自然を守ることができる考えた。田舎には大都会にはない樹木葬を受け入れる論理が存在した。

2-3. 樹木葬の数

全国の樹木葬の数を把握しているところはない。樹木葬が紹介されているWeb-siteを見ると2015年9月現在、「エンディングパーク」(<http://en-park.net/books/571>)では50カ所、「樹木葬なび」(<http://www.e-jyumoku.com/>) 78カ所が掲載されている。しかし、寺の境内墓地や民間霊園の一角に小さなエリアの樹木葬をつくっているケースもあり、先のWeb-siteにはまだカウントされていない樹木葬もあることが推定されるので、確かな総数は特定することはできないが、おおよそ100カ所といったところだろうか。

地方自治体としては、神奈川県横浜市が2008年に「横浜市営墓地メモリアルグリーン」の中に建設し、東京都は2012年には「都立小平霊園」樹林墓地、また埼玉県では企業局が樹木葬エリアを含む霊園を検討している。

2-4. 樹木葬の形態

樹木葬にはいくつかの形態がある。所在地域の特性からいって「農村型」「都市型」に分け、さら

に墓地の所有上の形態からいって、住宅でいう戸建てを「個別型」、集合住宅と同じように個別スペースを有しながらそれが接続して1つの墓をつくるタイプを「集合型」、そのほか一つの区画に不特定多数の人々で入る「合葬型」に分けている（図表4）。

最初に樹木葬を実施した岩手県一関市・知勝院の樹木葬墓地が、一つの区画に一本の木を植える形態であったため、それに続いてできた千葉県いすみ市・天徳寺や、千葉県袖ヶ浦市・真光寺、山口県萩市・宝宗寺、神奈川県茅ヶ崎市・成就院の樹木葬墓地では、一区画に一本の木を植える形式であった。すなわち農村部の里山型といわれる樹木葬では、樹木葬の専用墓地として許可を受け、一区画に樹木も1本という形態を主として採用している（写真2）。

ところが、2005年に開設したNPO法人エンディングセンターの「桜葬」（東京都町田市・町田いずみ浄苑フォレストパーク内）や、2006年に開設した神奈川県横浜市立メモリアルグリーンの中の樹木型墓地では、他に墓石を立てる墓地などと並存して樹木葬エリアをつくり、シンボルの樹木を共有する「集合墓」や、一つの墓に不特定多数の人々が一緒に埋葬される「合葬墓」（合葬式墓地）が登場し、現在は集合墓の形態が多くなっている（写真3）。

図表4 樹木葬の類型

所在地	農村	里山型樹木葬
	都市	都市型樹木葬
墓地	単独型	雑木林等を樹木葬専用として認可を受けた樹木葬墓地
	エリア型	墓地内に一般墓と並存する形式の樹木葬エリア
墓所	個別型	個別で使用する（住宅でいう戸建て）
	集合型	個別区画が隣接する形で1つの墳墓をなす（住宅でいう集合住宅）
	合葬型	1つの墓に不特定多数の人が一緒に埋葬される



一関市 知勝院「樹木葬墓地」
写真2 里山・単独・個別



認定NPO法人エンディングセンター「桜葬」
写真3 都市・エリア・集合墓

2-5. 使用権と埋葬の形態

墓地の使用権は、永続的に使用できる無期限のものと、期限を切って使用する有期限のものがある。有期限の場合の期限は、33年、17年、13年などが多い。これは「弔い上げ」という考えに因っている。それは次のような考え方である。日本人は古来より、人が死ぬと肉体から死霊が遊離し、死後しばらくは荒ぶれた不安定な霊魂として存在すると考えてきた。それを子孫が長期にわたって祭祀することによって、死霊は子孫を加護するような祖霊に昇華する。そのような個としての供養を終えて、家のご先祖様一般という括りに入り、個別の弔いを打ち切る時期が33回忌とされてきた。このように日本の民間信仰を仏教が仏教行事として取り込んできた。したがって、仏教寺院の樹木葬の場合は33年の有期限とするところが多いが、特定の宗教に関わることを許されていない地方自治体の墓などでは、30年とするところがある。また最後に埋葬された時から13年とするケースや、期限が来ても更新できるところもある。

有期限の場合、期限が来たら遺骨を他の所に移すという改葬を行うため、遺骨を取り出しやすい形態、すなわち土地の下に円柱や角柱形の容器が入っていると、あるいは骨壺で埋めるなどと言った方法が必要となってくる。一方で無期限の場合は遺骨の改葬がないため、遺骨を直に土に埋めるケースが多い（図表5、写真4・5）。

図表5 埋葬の形態

地下	何もない
	底蓋がない円柱形や角柱形の筒が入っている
遺骨の埋め方	直に埋める
	天然素材の布袋に入れて埋める
	骨壺に入れて埋める



写真4 遺骨を直に埋める

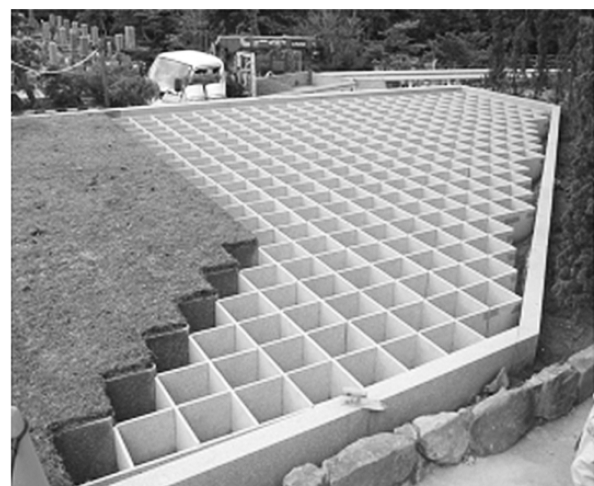


写真5 底蓋がない角柱形

2-6. 合同祭祀

樹木葬墓地は、そのほとんどが継承を前提としない非継承墓であるため、墓の運営者側で合同祭祀をおこなっている。地方自治体がつくった樹木葬は、宗教を介さず故人を追憶するイベントとなっている（写真6）。



写真6 合同祭祀「桜葬メモリアル」

2-7. 使用料

使用料は、都会と田舎の地価によって違うし、個別型、集合型、合葬型の順に安くなるのは当然である。最初にできた一関市の知勝院の樹木葬が、一区画（半径1mの円）80万円だったので、しばらくは個別型の樹木葬区画で80万円が踏襲されたが、当然のことながら都会の地価は高く、地方と同様な値段で墓地ができるわけではない。東京都町田市のNPO法人エンディングセンターの桜葬墓地（集合型）では一人区画（30cm四方）40万円からある。さらに皆が一緒に入る合葬型となると10万円前後から20万円ぐらいの価格が多い。

東京都の2012年に募集を開始した樹林墓地は、一つの穴に不特定多数の人たちが入る合葬型（写真7）で、遺骨1体が134,000円、粉状の遺骨ならば1体44,000円であった。



写真7 東京都立小平霊園の樹林墓地

3. 樹木葬申込者の属性

3-1. 都営の樹林墓地申込者

公営では2012年に、横浜市に次いで東京都が樹木を墓標とした墓地の募集を開始し、16倍という高い応募があった。申込時の遺骨のあるなしで比べてみると、「遺骨あり」は募集体75体、応募369体で、倍率が4.9倍であるのに対し、「遺骨なし」すなわち「生前」の申し込みでは、募集325体、応募7067体、倍率21.7倍にもなった。このことから、圧倒的に生前に自身の墓を求める人が多いことがわかる（図表6）。

図表6 平成24年度（2012年）の都立小平霊園の応募状況と倍率

遺骨の有無	粉骨	1 体	募集数 (体)	応募数 (体)	倍 率
		2 体			
遺骨あり	粉骨前	1 体	20	155	7.8倍
遺骨あり	粉骨前	2 体	10	74	7.4倍
遺骨あり	粉骨済	1 体	25	75	3.0倍
遺骨あり	粉骨済	2 体	20	64	3.2倍
遺骨あり	粉骨前	2 体	40	498	12.5倍
+生前					
遺骨あり	粉骨済	2 体	60	236	3.9倍
+生前					
生前	粉骨前	1 体	30	959	32.0倍
生前	粉骨前	2 体	100	3110	31.1倍
生前	粉骨済	1 体	47	730	15.5倍
生前	粉骨済	2 体	148	2268	15.3倍
合計	---	---	500	8169	16.3倍

出典：エンディングパーク（<http://en-park.net/books/5138>）

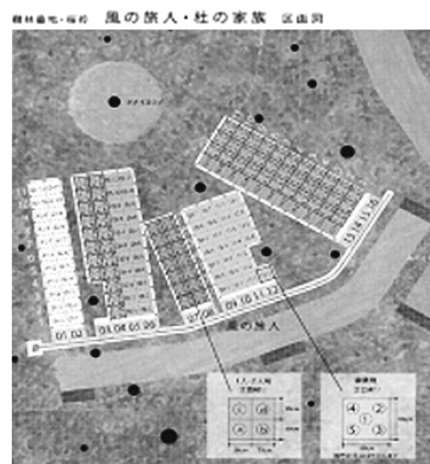
4. 事例・認定NPOエンディングセンター「桜葬」墓地

4-1 「桜葬」墓地は集合墓

認定NPO法人エンディングセンター（理事長・筆者）が企画し、会員運営している「桜葬」墓地は、樹木を墓標とした「樹木葬」の一種で、シンボルツリーを「桜」にしたものである。桜の木の下に個別区画があって、それが隣接して一つの墓域を形成するという「集合墓」になっている（写真8）。個別区画には家族・個人を特定するような墓石は立てず、近くに共同の銘板を置く。それは、誰が埋葬されているか全くわからない「匿名」ではなく、だいたいあの辺に誰が眠っているということが分かる形式。それを筆者は半分匿名の意味の「半匿名性」といっている。

「集合墓」にした意味は、継承を前提としない墓に適した形態であることと、「ゆるやかな共同性」が生まれやすい形態であることの、2つがあげられる。

一般的な墓は、住宅でいう1戸建てと同様に、1区画ごとに墓石が立ち、墓所は外柵という垣根で囲まれている。こういう形式では、その家族に継承者が絶えれば無縁墳墓として片付けられてしま



認定NPO法人エンディングセンター「桜葬」墓地
写真8 集合墓

う。しかし、「桜葬」は、個別区画としての使用权を持ち、そこには自分たちで決めた人以外は埋葬されないが、隣同士の部屋がくっついて大きな1つの建物となるマションのように、一つの墓域をつくっているため、継承者がいない区画があっても、皆で守っていくことができるという特徴がある。

4-2. 無縁社会における「結縁」

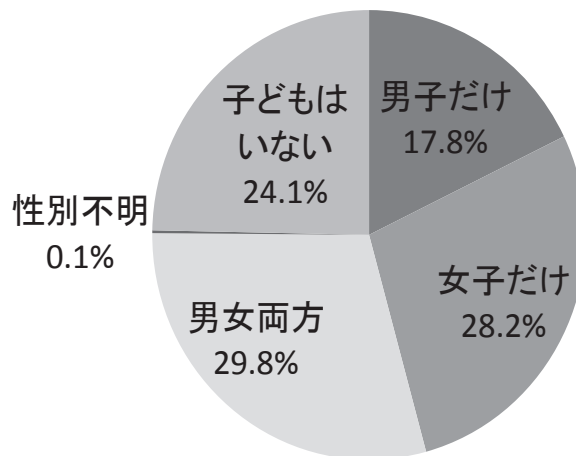
桜の咲くころ皆が集まって「桜葬メモリアル」という合同祭祀を行うので、身内がいなくても墓を同じくする仲間とともに祭祀されていく。家族も含み込みつつ、しかし家族という単位に縛られない。一本の桜の木の下に皆で眠り、皆が集う。そこに眠る人も、眠る人を偲んで訪れる人も、まさに「血縁」から「結縁」へ。つまり血の縁の「血縁」を含みつつ、それを越えた結ぶ縁の「結縁」でつながっている。

また、家族だけでは介護や看取り、死後の葬送を担うことが難しい社会で、桜をシンボルとして集まった隣同士が、墓を核として縁を結ぶ。「死んだらみんな、あのお墓に入る仲間たち」という、家族を超えた絆＝「墓友」の活動が生まれている。

この特徴を筆者は「ゆるやかな共同性」といっている。行事の参加・不参加も自由に選べ、毎月墓参に来ている人同士が出逢い、そこで同じような境遇や考えの人とめぐり会って、そこから人間関係が生まれ「墓友」となるケースも増えている。自主サークルもでき、語り合いの会もある。終活講座から食事会や音楽会、旅行に行く人たちまで出て来ている。晩年を同世代の相互扶助で、明るく乗り切ろうという意気込みさえ感じる。

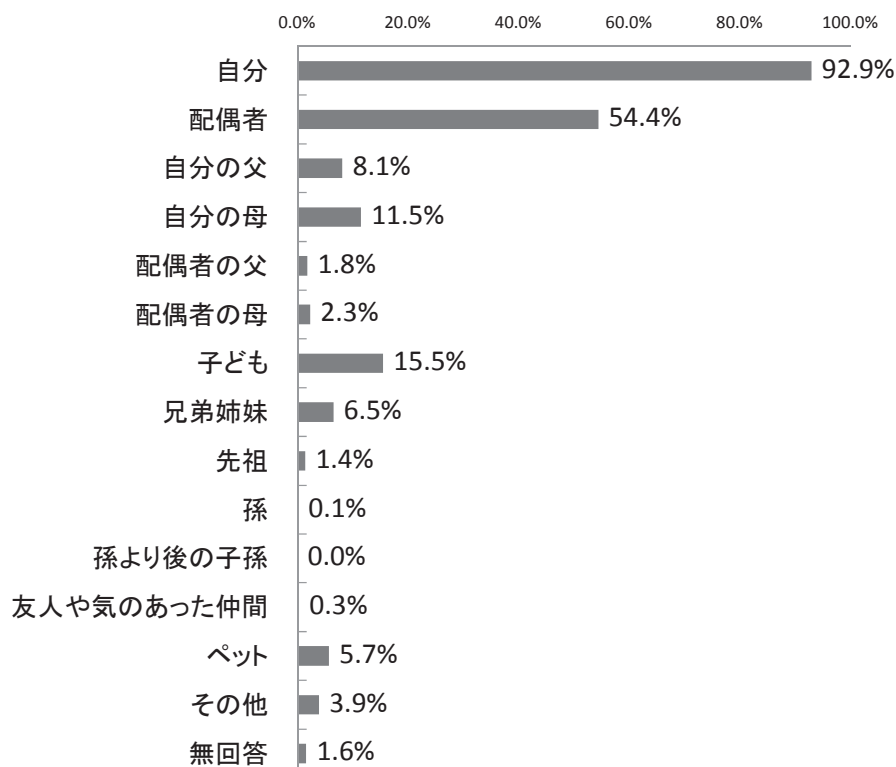
またエンディングセンターでは、葬儀の担い手を確保できない人々のために、自分の死後のことをエンディングセンターに委任する「生前契約」によって、「喪主の代行」をはじめとするエンディングサポートを行っている。

図表7 「桜葬」申込者の子どもの状況



「桜葬」に関する会員意識調査、2012年

図表8 「桜葬」墓地に入ることが、現時点で決まっている人

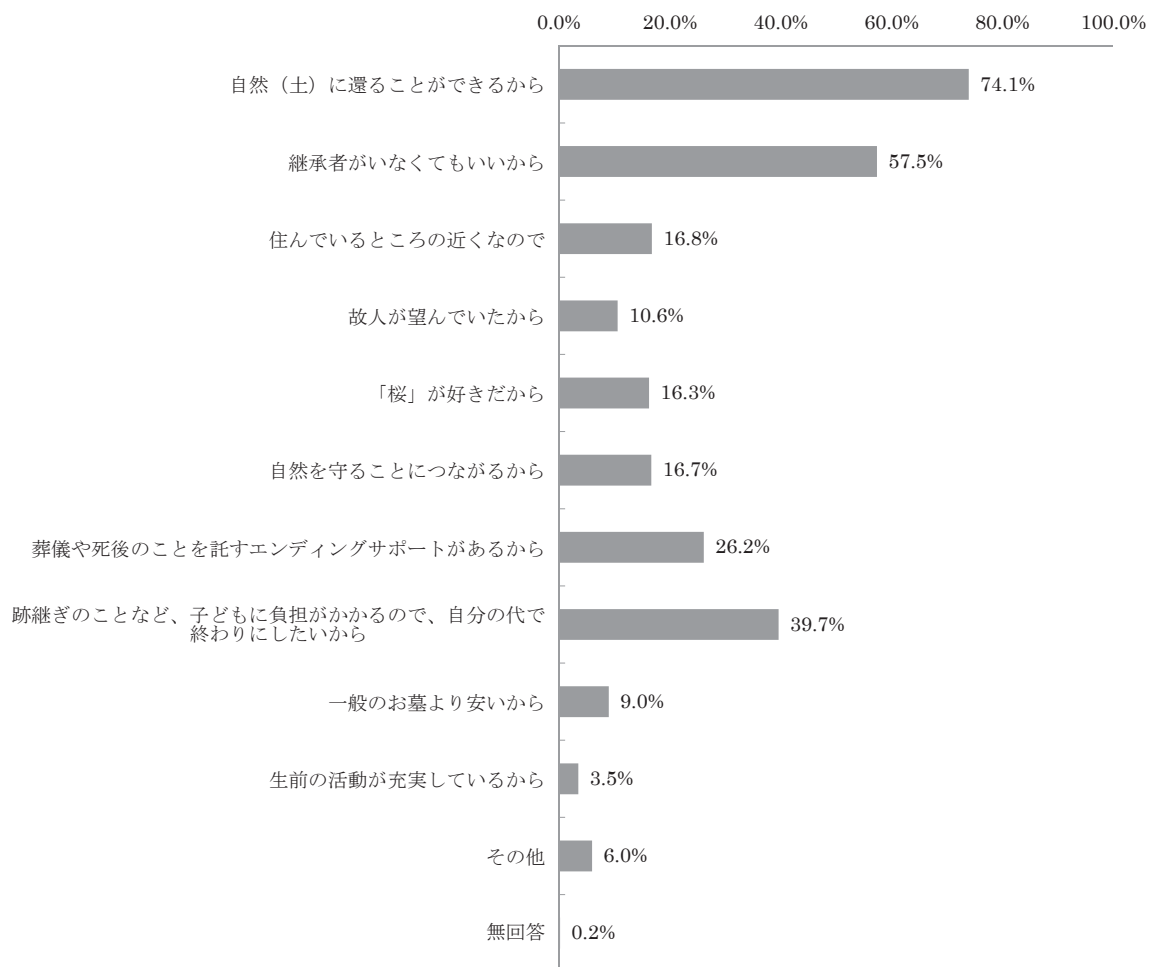


「桜葬」に関する会員意識調査、2012年

4-3. 申込者の属性

跡継ぎを必要としない桜葬は、どのような人たちが申し込んでいるのか、「桜葬に関する会員意識調査」⁽²⁾（2012年、調査：井上治代）の結果を見ると、子どもが「いない」人はたったの24%、「いる」人の方が76%と多く、そのうち「男子がいる」と答えた人は48%だった（図表7）。男子がいても、跡継ぎを必要としない墓を買う人々の存在から、墓の継承制がもう制度疲労を起こし、現代人に適合しなくなっている状態が浮かび上がってきた。

図表9 「桜葬」墓地を選んだ理由はなんですか。(上位3つ以内) (n=1213)



「桜葬」に関する会員意識調査、2012年

男子がいるケースでは、中高年で未婚であったり、子どもがいなかったり、障がいがあったり、海外暮らし、親より先に亡くなる、妻方の「墓守り」になってしまった、など様々な理由があった。

墓を申込んだ時点で、入ることが決まっている人は「自分」92.9%、「配偶者」54.4%となり、半数強が夫婦で入る人が多いことがわかる。一方、「子ども」と回答した人はたったの15.5%でしかなかった（図表8）。

4-4. 桜葬墓地の購入理由

桜葬購入の理由をみると、①自然に帰ることができるから74%、②継承者がいなくてもいいから58%、③跡継ぎのことなど、子どもに負担がかかるので、自分の代で終わりにしたいから40%、④葬儀や死後のことを託すエンディングサポートがあるから26%の順であった（図表9）。

申込者は子どものいない夫婦や、単身者もいるが、夫の実家の墓に入りたくない妻、ペットと一緒に入る家族、障害を持った子どもを持つ家族、離婚した母親の墓を探す娘たちなどさまざまである。

多様化した生き方が市民権を得る一方で、自分の最期は自分で考え準備しなければならない社会が

訪れて、家族で代々守っていくお墓のシステムは、意味が薄れつつあるようにみえる。樹木葬は決して跡継ぎのいない人々のための墓ではなく、一般的な選択肢の一つになっていることがわかる。人々は伝統の良さを踏まえつつも、それに代わる新しいコミュニティ、追悼のあり方を模索しはじめている姿が捉えられた。

戦前の家制度時代のような「家族の永遠性」が見込まれない時代に、家族も含みつつ「自然の永遠性」にかぎりなく回帰していく。このように樹木葬は、家族の変化や自然破壊が起こった、高度経済成長を成し遂げたあとの社会に出現する傾向があり、先進諸国に共通して見られる墓の一形態である。

【注】

- (1) 生涯未婚率は、2030年に男性30%、女性23%になると推計されている。2030年には日本の総人口は1億1662万人に減ると予測されており、そのうち4911万人が未婚者と死別・離別者となる。その割合は実に42%にも上る。「2010年は、全年齢の既婚者6497万人に対して、未婚者が3020万人、死別・離別者が1552万人でした。これが2030年には、既婚者が5497万人に減り、未婚者は3027万人で横ばいですが、死別・離別者が1884万人に増加します。未婚者と死別・離別者の合計は4572万人から4911万人に増加。総人口の半数近くが未婚者と死別・離別者で占められるのです。特に80歳以上で死別・離別（実際には多くが死別者）が激増しています」『データでわかる2030年の日本：』より
- (2) 「桜葬」に関する会員意識調査／1. 調査名：「桜葬」に関する会員意識調査／2. 対象：NPO法人エンディングセンター会員（正会員・一般会員）／3. 調査者：井上治代（東洋大学ライフデザイン学部教授）／4. 方法：郵送法／5. 期間：2012年8月16日～25日／6. 回答数：郵送総数：1768通、有効回答数：1284通、無効回答数：22通／本調査は、井上治代が科学研究費助成事業＜学術研究助成金助成金＞を受けて実施したものである。

【参考文献】

井上治代2012年『桜葬―桜の下で眠りたい』、三省堂

井上治代2012年「集合墓を核とした結縁―桜葬の試み」p239～p263、大谷栄一他編著『地域社会をつくる宗教』叢書 宗教とソーシャル・キャピタル 第2巻、明石書店